

影一つ。

作・



戦時中のとある病院の近く公園。車椅子の少女は公園へ散歩に来るのが毎日の日課であった。特に何かをする訳でもなく、毎日同じ場所に座り、同じ景色を眺める、その繰り返し。友達もいない、家族もいない、孤独の身。側にいるのは、心を持っているが口の聞けないロボットだけ……。少女は生まれた時から足が不自由で、人生の殆どを車椅子と共に暮らしてきた。そんな彼女の小さな願いは「自分の足で歩きたい。」

しかし、時が経つにつれ彼女自身の中で既に諦め心が生まれていた。どれだけ頑張っても出来ない、努力は報われないんだと。

そんなある日、少女は公園で一人の男と出会った。その男は彼女と同じ壁を持っており、話していくうちに、感じていく物があった。それは、痛み・苦しみ・悲しさ。人と話せる事の楽しさ、人と話をする事が出来ない悲しさ、人を傷つけた時の痛み。

それを知った少女は……。

そして、気持ちを伝える事が出来ないロボットは……。